



Title	ロベール・ルパージュ作品における「他者」
Author(s)	神崎, 舞
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/50448
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (神 崎 舞)	
論文題名	ロベール・ルパージュ作品における「他者」
論文内容の要旨 ロベール・ルパージュ(Robert Lepage, 1957-)は、カナダのケベック・シティ出身の演出家であり、劇作家、そして俳優である。しかし、演劇だけでなく、映画やオペラ、さらにサーカスなどさまざまなジャンルの演出に挑戦してきた。中でも彼をとりわけ有名にしたのは、リヒャルト・ワーグナー(Richard Wagner)の代表作『ニーベルングの指輪』(<i>Der Ring des Nibelungen</i>, 2010-2012)の演出と、シルク・ドゥ・ソレイユの2度の演出である。これらの上演からルパージュは、今やシルク・ドゥ・ソレイユと並びケベックの「文化の外交官」として国際的に知られている。 このような活躍ゆえに、ルパージュの作品は、カナダ演劇という文脈で語られるよりも、カナダを超越した作品として注目されている。彼が国際的に評価される要因としては、ルパージュ作品に見られるさまざまな文化的背景を有した登場人物や巧みに操られた視覚効果、また多言語・多文化的な特徴などが挙げられる。しかし国際的であると同時に彼の作品にはカナダのケベックという地域性が表れている。むしろこのケベックに根差したアイデンティティこそが、現代演劇史におけるルパージュ作品の特異性といえる。そしてこの地域性を考察するには、「他者」の表象分析が重要な鍵となると考えられる。なぜなら、彼が「他者」を積極的に表象するのは、それが「自己」を映し出す鏡の役割を果たしているからである。 ルパージュにとっての「他者」は、かつての宗主国フランスやイギリス、英語圏カナダ、東洋（中国や日本）、そして先住民など多岐に渡る。さらに、ルパージュの「他者」には、異なるジャンルも含まれる。彼は、演劇にとっての「他者」である映像やダンス、そしてサーカスとも取り組むことで、演劇という枠組みにも挑戦してきた。 「他者」の表象からルパージュの地域性や自己の探求を検討するためには、まず個々の作品の舞台表象を丹念に分析し、そこに描かれている「他者」の存在に着目する必要があると考えた。自己が絶えず変化し続けるものであることを反映するかのよう、ルパージュの「他者」の表象は作品ごとに変遷し、決して一様ではない。またそれぞれの作品の「他者」をより深く理解するには、作品の制作過程を辿り、ルパージュが題材としたものを分析することも必要である。それによって舞台表象だけでは知りえない「他者」が理解できると同時に、ルパージュ作品においては、「他者」と「自己」との境界が限りなく曖昧となっている点が、どのように表象されているのかが明らかになると考えられる。 そこで本論文では、「他者」の表象の詳細な分析及び、その差異に注目するために、一般公開されていない資料やルパージュ本人及び制作者のインタビューなども参考にして、先行研究には見られない新たな視点を加えることを目指した。 まず序章では、ルパージュと彼の初期の活動をケベック演劇の流れに位置づけて、ルパージュの草創期の活動を明らかにした。そして国際的な認知を得るまでのルパージュの初期活動を中心に追うことで、国際性とケベックという地域性を併せ持つルパージュ作品の萌芽を見出した。 次に第1章では、かつての宗主国フランスを「他者」として表象した『アンデルセン・プロジェクト』(<i>Le Projet Andersen</i>, 2005)と、英語圏の演出家や俳優との共同制作を手掛けた『ロミオとジュリエット』(<i>Romeo & Juliette</i>, 1989)を取り上げた。前者でルパージュは、アンデルセンの影の部分に焦点をあて、彼の童話の登場人物、さらにルパージュが創り出した架空の人物であるケベック人、フランス人、そしてモロッコ系移民の3人を巧みに絡み合わせることで、重層的な構造を作り上げている。アンデルセンが抱えていた言語的、芸術的、そして性的苦悩に注目することで、「他者」として表象されたものが実は「自己」であることを明らかにした。そして登場人物の隠蔽された「自己」が舞台上でいかに表象されているか、またアンデルセンを含めた4人の登場人物をルパージュの分身とすることで、それらがなぜルパージュ自身の、さらにはケベック人のアイデンティティにまつわる問題を反映したものになっているかについて考察した。また『ロミオとジュリエット』では、英仏の2言語を用いることで、カナダにおける英語圏／フランス語圏の間に生じる葛藤を解消することの難しさが顕在化したこと、さらにその対立が、1990年にシェイクスピア演劇の聖地ストラットフォードで上演されると、より一層際立つ結果となったことを明らかにした。	

第2章では、東洋を扱った作品、すなわち『ドラゴンズ・トリロジー』(*La Trilogie des dragons*, 1985)と『ブルー・ドラゴン』(*Le Dragon bleu*, 2008)、そして『太田川七つの流れ』(*Les Septs Branches de la rivière Ota*, 1994)を取り上げた。東洋を題材に扱った作品では、一見ケベックの問題は関係ないように思われる。しかしこれらの作品でも、ルパージュの関心がケベックから離れることはない。その顕著な例が、ルパージュの初期代表作『ドラゴンズ・トリロジー』である。この作品においては、既成の枠組みに違和感を覚えるケベック人の登場人物が、「他者」であるはずの中国人や日本人に自己投影する様を例証した。ここでは、先行研究で一度も指摘されてこなかった、中国人と日本人を作中に描いた理由も探っていく。そしてケベックの閉鎖性を見出すために中国人を描くと同時に、東洋に対するステレオタイプを崩す手段として日本人を描いたことを証明した。その上で、作品に登場する人物が、言語的にも民族的にも曖昧である「自己」の存在に気づき、東洋も含めた複数の異文化が混在した状態にケベコワとしてのアイデンティティを見出す過程を捉えた。そしてそれは、西洋／東洋といった既存の枠組みを再考する契機にもなっている。

次に『ドラゴンズ・トリロジー』のスピン・オフ作品である『ブルー・ドラゴン』を第2節で取り上げた。本論では、『ブルー・ドラゴン』とベルギーの漫画家エルジェの『青い蓮』(*Le Lotus bleu*, 1936)とを比較し、仏教思想やルパージュ及びエルジェの中国観に繋がる「蓮」の表象を通して、登場人物の内面の苦悩がどのように描き出されているのかを分析した。その結果、『ブルー・ドラゴン』はそれぞれの登場人物が、「他者」との出会いを通して「自己」と向き合うという自己探求の帰結ではなく、あくまでその過程を示したものであることを明らかにした。

ルパージュは東洋の中でも、中国と同様に、あるいはそれ以上に日本への関心を示してきた。広島から着想を得た『太田川七つの流れ』には、ルパージュが抱いた日本に対するイメージが表象されている。そのイメージとは、日本が自国文化を守りながらも、異文化を摂取してきたというものである。そこで、『太田川七つの流れ』の中でルパージュが魅了されたという日本文化の重層性がいかに表象されているのか、そしてこの作品がそれ以降のルパージュ作品の方向性を示す作品であることを検証した。

このようにルパージュは、さまざまな「他者」を表象しているが、「演劇」というジャンルの「他者」とも積極的に取り組んできた。第3章では、ルパージュが、演劇以外のジャンル、たとえば映像、ダンス、サーカスなどいかに取り組んでいるのかについて考察した。特にルパージュは映像の使用に卓越している。そこで、一人芝居『エルシノア』(*Elseneur*, 1995)、『月の向こう側』(*La Face cachée de la Lune*, 2000)そして『アンデルセン・プロジェクト』の3作品を取り上げながら、ルパージュが観客には本来見えない登場人物の視点を映像によってどのように呈示しているのかを例証した。

次に、ルパージュとフランスのバレエダンサーのシルヴィ・ギエム(*Sylvie Guillem*)、そしてイギリスのコンテンポラリー・ダンサーのラッセル・マリファント(*Russell Maliphant*)といった3人のアーティストによって共同制作され、シュヴァリエ・デオン(*Chevalier d'Eon*, 1728-1810)という人物から着想を得た『エオンナガタ』(*Eonnagata*, 2009)を取り上げた。作品の構成や場面展開を分析することで、ルパージュたちが人生の半分を男性として、そして残りの半分を女性として生きたエオンという人物を、ダンス及び歌舞伎や文楽の様式を用いながらどのように表象しているのかを考察した。それにより、この作品が、性における既存の枠組みの虚構性を露呈することで、既成概念の恣意性を再考させていることを明らかにした。

最後に、ルパージュが演出を手がけたサーカス、シルク・ドゥ・ソレイユの『トーテム』(*TOTEM*, 2010)を考察した。先住民の中でもケベック州に住むヒューロン族の思想の影響が見られるため、作品のタイトルや内なる「他者」としての先住民の表象、ダンス、そして音楽にはカナダの、それも特にケベックという地域性が見られることを指摘した。一方で『トーテム』はケベックという地域性を浮き彫りにしながらも、ケベックという州境、カナダという国境を越えるだけでなく、入植者と先住民、さらには人間と動物といった、人間が作り上げたさまざまな境界の超越を試みていることを論証した。その結果、この作品があらゆる境界線に縛られている社会構造を見直す契機となっていることが明らかになった。

多民族国家を標榜するカナダの中でも、特殊な位置づけにあるケベックは、数々の軋轢や、それに伴って生じるアイデンティティの曖昧さを内包している。本論では、このような複雑な文化を抱えたケベックに生まれたルパージュの代表作を中心に分析しながら、ルパージュが国際的な活躍を見せながらも、ケベコワとしてのアイデンティティをどのように表象してきたのかを検証した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (神 崎 舞)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	永田靖
	副 査	大阪大学	教授	上倉庸敬
	副 査	大阪大学	名誉教授	市川明
	副 査	大阪大学	准教授	中尾薫
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ロベール・ルパージュ作品における「他者」

学位申請者 神崎 舞

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	永田靖
副査	大阪大学教授	上倉庸敬
副査	大阪大学名誉教授	市川明
副査	大阪大学准教授	中尾薫

【論文内容の要旨】

ロベール・ルパージュは、カナダのケベック・シティ出身の演出家であり、劇作家、そして俳優である。ルパージュの作品は、カナダ演劇という文脈で語られるよりも、カナダを超越した作品として注目されている。彼が国際的に評価される要因としては、ルパージュ作品に見られるさまざまな文化的背景を有した登場人物や巧みに操られた視覚効果、また多言語・多文化的な特徴などが挙げられる。しかし国際的であると同時に彼の作品にはカナダのケベックという地域性が表れている。むしろこのケベックに根差したアイデンティティこそが、現代演劇史におけるルパージュ作品の特異性といえる。そしてこの地域性を考察するには、「他者」の表象分析が重要な鍵となると考えられる。そこで本論文では、「他者」の表象の詳細な分析及び、その差異に注目するために、一般公開されていない資料やルパージュ本人及び制作者のインタビューなども参考にして、先行研究には見られない新たな視点を加えることを目指した。

まず序章では、ルパージュと彼の初期の活動をケベック演劇の流れに位置づけて、ルパージュの草創期の活動を明らかにした。そして国際的な認知を得るまでのルパージュの初期活動を中心に追うことで、国際性とケベックという地域性を併せ持つルパージュ作品の萌芽を見出した。次に第 1 章では、かつての宗主国フランスを「他者」として表象した『アンデルセン・プロジェクト』(2005)と、英語圏の演出家や俳優との共同制作を手掛けた『ロミオとジュリエット』(1989)を取り上げた。前者でルパージュは、アンデルセンの影の部分に焦点をあて、彼の童話の登場人物、さらにルパージュが創り出した架空の人物であるケベック人、フランス人、そしてモロッコ系移民の 3 人を巧みに絡み合わせることによって、重層的な構造を作り上げている。アンデルセンが抱えていた言語的、芸術的、そして性的苦悩に注目することで、「他者」として表象されたものが実は「自己」であることを明らかにした。また『ロミオとジュリエット』では、英仏の 2 言語を用いることで、カナダにおける英語圏／フランス語圏の間に生じる葛藤を解消することの難しさが顕在化したこと、さらにその対立が、1990 年にシェイクスピア演劇の聖地ストラットフォードで上演されると、より一層際立つ結果となったことを明らかにした。

次に、第 2 章では、東洋を扱った作品、すなわち『ドラゴンズ・トリロジー』(1985)と『ブルー・ドラゴン』(2008)、そして『太田川七つの流れ』(1994)を取り上げた。これらの作品においては、既成の枠組みに違和感を覚えるケベック人の登場人物が、「他者」であるはずの中国人や日本人に自己投影する様を例証した。ここでは、先行研究で一度も指摘されてこなかった、中国人と日本人を作中に描いた理由も探っていく。そしてケベックの閉鎖性を

見出すために中国人を描くと同時に、東洋に対するステレオタイプを崩す手段として日本人を描いたことを証明した。その上で、作品に登場する人物が、言語的にも民族的にも曖昧である「自己」の存在に気づき、東洋も含めた複数の異文化が混在した状態にケベコワとしてのアイデンティティを見出す過程を捉えた。そしてそれは、西洋／東洋といった既存の枠組みを再考する契機にもなっている。また『太田川七つの流れ』の中でルパージュが魅了されたという日本文化の重層性がいかに表象されているのか、そしてこの作品がそれ以降のルパージュ作品の方向性を示す作品であることを検証した。

最後に第3章では、ルパージュが、演劇以外のジャンル、たとえば映像、ダンス、サーカスなどにいかに取り組んでいるのかについて考察した。一人芝居『エルシノア』(1995)、『月の向こう側』(2000)そして『アンデルセン・プロジェクト』『トーテム』(2010)などを取り上げながら、ルパージュが観客には本来見えない登場人物の視点を映像によってどのように呈示しているのか、性における既存の枠組みの虚構性を露呈することで、既成概念の恣意性をどのように再考させているのか、人間と動物といった人間が作り上げたさまざまな境界をどのように超越しようとしているのかを論証した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文はカナダの演出家で国際的な評価のあるロベール・ルパージュの作品を主として、インターカルチュラル演劇の観点から、ケベックのアイデンティティ、アジアの表象、他者存在について、基本的には上演分析を行うことで説明を試みたものである。実際に見た作品を中心に扱っており、その点で扱っている作品は必ずしも多いわけではないが、先行研究や参考文献の入念な渉猟を踏まえており、全体的には90年代以降のルパージュの一つの側面は確実に捉えているものと考えられる。

序章でカナダ演劇全体を概観した後、第1章で『アンデルセン・プロジェクト』と『ロミオとジュリエット』を取り上げて、カナダにおけるケベコワの問題、英語圏とフランス語圏の間の葛藤と調停の試みの中で、他者存在に脅かされるマイノリティとしての自己の像を作品に反映させているルパージュを描いている。この問題は第2章でアジアを題材、もしくは舞台にしている『ドラゴンズ・トリロジー』『ブルー・ドラゴン』『太田川七つの流れ』において、集中的にアジアの表象の問題が取り扱われている。ケベコワのアイデンティティとアジアの表象とがルパージュにおいて不即不離の関係であることを、他の研究分野とのつきあわせることで、言わば学際的に論じている。また多領域で活動するルパージュへの目配りも第3章で行っており、マルチメディア、ダンス、サーカスの領域での仕事について、ジェンダーやレイシズムの観点からルパージュの立場を明らかにしており、第2章までのルパージュの取り組みを異なる側面からも照明を当てている。

ただし調査や議論が不十分な部分もないではない。基本的に上演分析の研究であるため、全体には舞台表象の分析に終始している印象が強い。上演分析では上演に至るプロセスについての言及がより求められるが、ルパージュの上演に至る試行錯誤についてももう少し論述できれば、全体により深みのあるものになったように思われる点。また本論の「他者」の定義が必ずしも明確でない点、参考文献を十全には活用できていない点、各章の結論一つ一つと、全体の結論に時折やや矛盾が見られる点、またしばしば結論先にありきで、上演そのものがあまりよく見えて来ない点、作品の分析と現実世界の分析を安易に結びつけている点など、今後の改善点も散見はされる。

しかし、本論文は複雑な文化を抱えたケベックに生まれたルパージュの代表作を中心に分析しながら、全体としてルパージュの作品における「他者」理解の特異性を確実に把握し、説明し得ており、十分評価することができる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。